会いたい

午雲堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
会いたい

【Ｎコード】
Ｎ８１６６Ｆ

【作者名】
午雲堂

【あらすじ】
マンガ好きの男の子が主人公のヒロインに恋をして、彼女の世界に誘い込まれます。ラブストーリーのつもりですが、ちょっと違うかも・・・。

もう高校生になったというのに、洋太はマンガばかり読んでいた。
といって彼は別にマンガ家になりたかったわけではない。
その証拠に彼はひとつの作品しか読まなかった。
その作品とはある高校生が主人公のラブコメディーだった。
彼はまるでとりつかれたかのようにその作品だけを繰り返し読んでいた。
いや、彼はとりつかれていた。
彼はその作品の主人公を同一視することでその主人公の男と同じように、ヒロインの女の娘に恋していた。
現実の世界の女の娘に興味がなくなるくらい、彼は虚構の世界の彼女を愛していた。
洋太にその作品の存在を教えてくれたのは同じクラスの高橋という男だった。
高橋も洋太に負けぬくらい、彼女のことを想っていた。
二人はいつもみんなとは離れて、その作品のことを語り合っていた。
彼女への想いを語り合っていた。

ある日、その作品が最終回を迎え、連載は終わった。
彼女は主人公の男と結婚して、二人の前から去っていった。
もはや彼女は共に新しい時を過ごしてくれる存在ではなくなった。
彼女は思い出として完結した作品のなかに遺された。
「ぼくたち失恋したね」
二人は二度と戻らぬ彼女を懐かしんで涙を流した。
以来洋太は高橋と会っても彼女のことをあえて口にはしなかった。
高橋もそうだった。
しかし彼女のことを忘れようとしているわけではなかった。

それは高橋も同様に見えた。
彼の眼がそう語っていた。
二人の彼女への想いは彼女がいなくなったためになおさら高まっていた。
洋太は昼も夜も彼女の夢を見た。

ある日高橋が洋太に思わぬことを口にした。
「最近たまに彼女を見かけることがあるんだ。」
洋太は彼が夢のことをいっているのだと思い、きいてみたが、そうではなかった。
「街なかで彼女を見かけるんだ。ぼくのイメージどおりに現実化した彼女が、ぼくらの世界に現われたんだよ。」
高橋の眼がそれが真実であることを物語っていた。
「あいつと一緒か」
主人公の男と一緒にいるのかと洋太はきいているのだ。
「いや彼女ひとりだ。誰かをさがしているような、誰かを待っているような眼をしていた。」
「話してみたのか」
「いや。声をかけようとするといつの間にかいなくなってしまうんだ。」
高橋はそういって寂しそうな眼をした。
しかし彼の全身からは彼女を実感できた喜びが満ちあふれていた。
洋太は彼をうらやましく思った。
彼はまだ彼女を実感できずにいたからだ。

以来彼は彼女の思い出に浸るのをやめた。
(会いたい)
彼は心の底からそう思った。
来る日も来る日も彼女の姿を求めて街をさまよい歩いた。
そして歩き疲れると、高橋が彼女を見かけたという喫茶店で、日

が暮れるまで休んで過ごした。
そしてその日もいつものように窓際の席に座り、アイスコーヒーを注文した。
そしていつものように外をながめ、彼女のことを想っていた。
通りをゆく人の流れは異様に速く思えた。
そのなかに恋人同志とみえる若い男女を見つけるたびに彼は彼女の面影をさがした。
（会いたい）
彼がいつものように何十度目かのその言葉を虚しく心につぶやいたとき、いつしかその日も暮れようとしていた。
かすかな夕日が差し返す窓ガラスに彼の面影が薄赤く映えていた。
彼女の恋人になろうとする彼の思いが、いつの間にか彼の姿をあいつそっくりのものに変えつつあることに、彼は気付いた。
彼は仕種も言葉遣いも表情のつくり方も意識して変え、あいつになりきろうと努力してきたのだ。
いま、その努力が実りつつあった。
（彼女はきっとぼくを愛してくれる）
彼がそう心の中でつぶやいたとき、チリリンという呼び鈴の音と共に店のドアが開いた。
彼にはもうわかっていた。
その新しい客は彼女だった。

彼女は小さく手を振って彼に微笑みかけた。
「ごめんなさい、待った？」
「ううん、今きたとこだよ」
彼は何の違和感もなくあいつのセリフをなぞっていた。
彼は彼女を実感したのだ。
窓に映る彼の姿は今や完全にあいつー彼女の恋人の姿に変貌していた。
洋太はもういない。

彼は洋太ではない別人格と化して、彼女の世界に存在していた。
それからの彼は彼女の世界の住人たちと暮らすことになった。
彼はかつて彼女が生きていた虚構世界を現実世界として体験していった。
そして彼女たちとの虚構の青春時代を思う存分楽しんだ。
やがて彼は彼女と結婚した。
これから先は、彼がかつて存在していた世界の誰も知らない未来だった。

彼は愛する人を独占できた喜びに浸っていた。
しかし、それも長くは続かなかった。
彼女は女の娘をひとり産んで亡くなってしまったのだ。
「ありがとう。この子をお願いね……」
彼女はそういい遺してひとり逝ってしまった。
そのときの彼女は最高に美しかった。
彼は至福の悲しみを味わった。

彼は彼女に娘を立派に育てることを固く誓った。
しかし、彼女が死んでからの彼の暮らしはまさに地獄の苦しみだった。
彼はこの世界では平凡で優柔不断なお人好しの人物として設定されており、世渡りが下手だったのだ。
彼は何をやってもうまくいかず、職業を転々とした。
他人にだまされてばかりいた。
それでも彼はあのときの最高に美しい彼女の面影を胸に秘め、娘を守り育てた。
やがて娘が一人前になった時、彼は喜びに充たされたが、それとひきかえに、彼の心身には老いが迫っていた。
娘は彼女の生まれ変わりのように彼女にそっくりだった。

ひまわりのように美しい自分の娘を見るにつけ、彼はかつての青春の日々を想った。

ある日彼はかつての恋敵、佐藤と再会した。
佐藤は彼の娘を見て目を丸くした。
「彼女が甦ったみたいだ。昔を思い出すなあ。」
「おれもそうなんだ。」
「今より二十年若返ることができたらおれはおまえの娘を嫁にもらって人生やり直したいね。」
「おいおい、まだ彼女に未練があるのか」
「あるある。大ありだよ。結局、あいつとも別れちゃってね。おれはもう十何年もひとりぼっちでこの世をさまよってるよ。」
彼女のことをあきらめて別の女と結婚した佐藤も、彼女なしではこの世界では充たされることのない人間のひとりだったのか。
「老けたなァ、佐藤」
「おまえこそー」
二人は寂しく苦笑し合った。

それから佐藤はこんなことをいった。
「おれ、この頃どうしても彼女に会いたくなってな。いつも気が付くとこの辺りまで来てるんだ。」
「それでおれたちはこうして久々に再会したというわけか」
「そうだ。この街はおれたちの思い出の場所だからな。」
「だからっていまさら彼女に会えるわけがないだろう」
彼が鼻であしらうと、佐藤は真顔になってこうささやいた。
「いや。たまに彼女を見かけることがあるんだ。」
「なに？」
「それがどう見ても彼女なんだ。ほら、よく言うだろう、世の中には自分に似た人間が三人いるって、あれだよきっと。」
「本当かよ」

「本当だ。もし彼女でなければ、彼女の分身か何かだろう。よしんば他人の空似でもいいじゃないか、もう一度彼女に会えるなら…」
佐藤の眼が、それがあながち法螺ではないことを物語っていた。
「彼女もひとりで街をさすらってるふうだ。誰かをさがしているような、誰かを待っているような眼をしていた。」
彼はどこかでそのセリフを聞いたような気がした。
しかし思い出せなかった。
「でも今日おまえの娘を見せられて少しがっかりしたよ。多分おれはおまえの娘を見て彼女と思い込んでいたんだろう。」
佐藤はそういって寂しそうに笑った。
「それはありえるな」
そう応えながら、彼は内心まったく別のことを考えていた。
（おれの娘はそんなふうに街をさすらう娘ではない。もしかしたら彼女の面影をもった別の人間がいるのかもしれない。）
佐藤は彼に一枚のメモを渡して、こういった。
「おれ、今度この街に越してきたんだ。ほらみんなでよく行った喫茶店があっただろう。あの店を買い取って、おれがマスターやってるんだ。よかったら来てくれよ。」
「ああ…」
「あの喫茶店で待ってれば、彼女が来てくれそうな気がするんだよな。」
「そうか…」
「本当に来てくれよ、待ってるぜ！」
佐藤は帰っていった。

佐藤の始めた喫茶店とは、かつて彼が彼女と初めてデートの待ち合わせをした場所だった。
以来彼は彼女の思い出に浸るのをやめた。
（会いたい）
彼は心の底からそう思った。

来る日も来る日も彼女の姿を求めて街をさまよい歩いた。
そして歩き疲れると、佐藤のやってる思い出の喫茶店で、日が暮れるまで休んで過ごした。
そしてその日もいつものように窓際の席に座り、アイスコーヒーを注文した。
そしていつものように外をながめ、彼女のことを想っていた。

通りをゆく人の流れは異様に速く思えた。
そのなかに恋人同志とみえる若い男女を見つけるたびに彼は彼女の面影をさがした。
（会いたい）
彼がいつものように何十度目かのその言葉を虚しく心につぶやいたとき、いつしかその日も暮れようとしていた。
かすかな夕日が差し返す窓ガラスに彼の面影が薄赤く映えていた。
再び彼女の恋人になろうとする彼の思いが、いつの間にか彼の姿を若返らせつつあることに、彼は気付いた。
彼は仕種も言葉遣いも表情のつくり方も意識して変え、若返ろうと努力してきたのだ。
いまその努力が実りつつあった。
（彼女はきっとおれを愛してくれる）
彼がそう心の中でつぶやいたとき、チリリンという呼び鈴の音と共に店のドアが開いた。
彼は当然のように首をねじってそちらを見た。
彼にはもうわかっていた。
その新しい客は彼女だった。

彼女は小さく手を振って彼に微笑みかけた。
「あらお父さん、偶然ね」
（娘なのか？）
彼は唖然とした。

その彼に背を向けて彼女は彼とは反対側の窓際のボックスに向かって声をかけた。
「ごめんなさい、待った？」
「ううん、今きたとこだよ」
彼女が笑顔で近寄っていった先には、彼の見知らぬ男が座っていた。

そのとき彼は見たのだ。
その男が若い頃の彼の姿に変貌していくのを。
（彼女は娘なのか？それとも彼女の生まれ変わりなのか？）
「おまえの娘は本当に彼女によく似てるなあ」
佐藤がカウンターから声をかけた。
「親のおれだって見まちがえるくらいだ」
彼は苦笑いした。
思い出の店に現れた彼女は、彼のことをお父さんと呼んだ。
彼はどうやら死ぬまで彼女の父親役を演じるしかなさそうだった。
そこはそういう世界だった。

彼女はやがて彼の若い頃に似たボーイフレンドと結婚した。
そのとき既に彼の身体は不治の病に冒されていた。
そういえば彼女にも母親はいなかった。
そして彼女の父親も、彼女と彼とが結婚してすぐ病気で亡くなったのだった。
いま彼を蝕みつつある病も、彼女の父親と同じものだった。

彼が病床に伏すと、娘は昼も夜もなく身を細らせて看病に努めた。
彼はもはや口が利けなかった。
彼は彼女に微笑みかけ、ただ涙を流すばかりだった。
（もう一度、君のように甦って君と暮らしたい）
（もう一度、会いたい）

（会いたい）
彼の気持ちが伝わったのかどうか、彼女はただ彼に微笑み返すだけだった。
そして彼がまさに逝かんとするとき、彼女はただ一言、
「ありがとう」
といった。

気がつくと洋太はひとり例の喫茶店の例の席にすわって例のごとく窓の外をながめていた。
夢にしては生々しすぎた。
それにこの心地よい疲労感。
家に帰ると案の定大騒ぎになった。
洋太は丸一日行方不明だったのだ。
彼は旅に出ていたと言った。
本当は彼女の世界にトリップしていたのだが、そういっておいても嘘ではない。

翌日学校に行ってみると今度は高橋が行方不明になっていた。
彼は彼女とどんな時を過ごしているのだろう。
洋太は高橋が帰ってきたら存分に語り合おうと思ってわくわくしていたが、高橋はなぜか何日たっても帰ってこなかった。

数日後、洋太にラブレターが届いた。
（会いたい）
言葉はそれだけで、待ち合わせ場所は例の喫茶店だった。
むろんそれで充分だった。

彼は例の席にすわり、例のごとく外をながめて待った。
やがてチリリンという呼び鈴の音がして、店のドアが開いた。
彼は思わず首をねじってそちらを見た。

彼女ではないかという予感はあった。
「ごめんなさい、待った？」
「ううん、今きたとこだよ」
二人はこの世界では初対面だが、もはや初対面ではなかった。
彼女はにっこりしながらこういった。
「こんどはわたしのほうが会いにきたの」
「高橋は？」
「え？」
「君に会いにいったはずなんだけど…」
「さあね」
彼女は視線をあさってのほうへそらせた。
「しばらく戻ってこれないんじゃない？」
「しばらくってどのくらい？」
「さあね」
ふたりは軽く口づけを交わした。

彼女の容姿はむこうの世界の彼女とは似ても似つかないものに変貌していたが、もうそんなことはどうでもいいことだった。
ここは現実界なのだからー。
洋太は二度とあいつのまねをしようとはしなかった。
そして彼女も決して彼女らしく振る舞おうとはしなかった。
彼女は彼女ではない別人格と化して、この世界に存在していた。
現実界ではとてもあいつらのまねなんかできやしないのだ。

（後書き）

心に残る作品というのは、マンガの分野にも、たくさんありますね。
読んでくれて、ありがとう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8166f/

会いたい

2011年10月23日03時25分発行